

「人はいない」

アラサー独身男の上野博士はある日電車内で見かけた女性のあとをつけ始める。見知らぬ人を気まぐれに尾行するのは彼の好きな一人遊びのひとつだ。警察沙汰になったり見知らぬ人を怯えさせたりしないようルールを作り、違反すればゲームオーバーと決めている。尾行の緊張感と知らない街に連れていかれるのを楽しむのである。

その日追いかけて始めた女性、愛莉は若い男と合流し、そのままラブホテルへと消える。ルール上ゲームオーバーではないので彼女が出てくるのを待つこととした。しかし昼間のラブホテル街は男一人が時間を潰すのにふさわしい場所がなく、人目が気になり落ち着かない。そこでいつも首にかけている大きなヘッドフォンをすることで盗聴マニアを装えると思いつく。電信柱の陰で愛莉が出てくるのを待つ間、人目を気にしていることを自覚して落ち込む。かつて視線恐怖症に陥り家を出られなくなった記憶が蘇り、その再発が恐ろしいのだった。気持ち落ち着かせるためいつものように辺りを見渡し、見慣れたマンホールを見つめる。それについて知っている限りの知識を頭の中で繰り返し返す間に彼は人目を気にしていたことを忘れ落ち着くことができた。ホテルから出てきた愛莉はすぐに男と別れ、一人で歩き出す。完全にルール違反と自覚しながらも上野は尾行をやめられない。ついに彼女の自宅までつきとめる。

それ以来毎日彼は愛莉を尾行し始める。彼女は平日勤

聞くようになる。

聞こえてくる音声から愛莉のことを知ってゆく。彼女は狩りのリスクを承知でできる限りの自衛をしている。自分勝手な男に対しても引かずうまく交渉して自分の思い通りのセックスへ導く。「いいセックスのために」と男から金を受け取る。それは視線恐怖症になって以来誰とも接触せず、意識上無人の街で生きてきた上野にとって新鮮で生々しいものだった。好奇心や興味をそそれつつ、同時に嫌悪し恐怖する対象でもあった。

淡々と任務を果たす毎日の中で解決済みだった視線恐怖症についての記憶が蘇ってくる。愛莉のセックスを聞きながら、思い出したくもない苦い記憶を熱心に掘り起こしてゆく。ひどい言葉をぶつけられたいやなヤツのこと。一人も友達ができず孤立した大学生活。いつも一人の自分を見る視線への恐怖。ひきこもり生活のなかで書物に救いを求め、やがてそのなから自分なりの解決策を生み出し救われたこと。それなのに愛莉と出会ってから築き上げたその生活が揺らいでゆくように感じて上野は不安を覚える。

ある日いつものように愛莉が男とホテルに入るのを見送り、部屋に入る音が聞こえた途端彼女の悲鳴が響く。上野はすぐホテルに駆け込み彼女を助け出す。愛莉によると部屋に入ると同時に男にショックガンをあてられたという。その体験に懲りたのか愛莉はもう狩りをやめると宣言する。

任務を解かれてから二か月たっても愛莉からはなんの連絡もない。上野はどうしようもない衝動に突き動かされ

め先から帰宅するまでにほぼ様々な男と落ちあいラブホテルに直行する。そのパターンを把握してからは平日のみ毎日ラブホテル街で彼女を待つようになる。自らのルールを犯し犯罪行為に足を踏み入れていると自覚しながらも、彼は愛莉の生活に好奇心を抑えられない。

尾行を始めて二週間がたった頃、ホテルから出てきて男と別れた愛莉は、駅へ向かわず上野が隠れている電信柱の前に立ち彼に話しかけてくる。上野を完全に盗聴マニアと思っているようだ。少しの会話を交わしたのち彼女はホテル街の奥へ歩き出し、また別のホテルに入ってゆく。そのホテルの前に移動して隠れるところがないまま路上に突っ立っていると、やがて男と出てきた愛莉が彼を見つけ「助けて」と叫ぶ。途端に男は走って逃げ、上野の胸に飛び込んできた彼女の顔には殴られた跡があった。どうやら相手の男がセックスの対価を支払わず暴力を振ったらしい。怯えた様子の彼女に頼まれ家の近くまで送る間、愛莉は相手の男のセックスについて明け透けに話す。けれど「エンコウしてゐるわけちゃうよ」と言う。

その日以来ラブホテル街に現れなくなった愛莉を上野は毎日待ち続ける。三週間ほどたった頃、諦めて帰宅しようとしていた彼の前に愛莉が現れる。彼女は自分の欲望について赤裸々に語り、男を漁る狩りがやめられないので身を守る術がほしいと言う。とまどう上野に盗聴器を手渡し自分のセックスを盗聴するようにと頼む。仕方なく電気街へ出かけた彼は盗聴電波の受信器を買い、彼女のセックスを

毎晩愛莉のマンションの前へ通ってしまう。そこで震えながら時間を過ごしていると愛莉から突然メッセージが来る。大喜びでおつかいに行き買い物してきたものを渡すために彼女の部屋へ入る。そこで彼女の身の上話を聞かされ、セックスへと誘われるが上野は恐怖から逃げ出してしまふ。元通りの人のいない街、愛莉のいない街を歩き、彼はどうしても愛莉から離れたくないと自覚し決意を固める。

愛莉と会う約束の日。完全に視線恐怖症が復活した上野は視線の壁を縫って必死で歩き続ける。しかし待ち合わせ場所のすぐ近くでどうしても動けなくなる。そこへ現れた愛莉は彼を見捨てるように「狩りを再開する」と宣言して人込みの中へ消えてゆく。僕は必死で立ち上がり全力であとを追う。